

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育

1
2008



好評発売中!

手づくりアンパンマンがいっぱい

人気のシリーズが、
＜全10巻＞揃いました!



26×21cm 96～104頁
定価2,100円(税込)

- | | | | |
|----|------------------|--------------|--------|
| 1 | グッズ・プレゼント | 島田明美/著 | 356-01 |
| 2 | ルームデコレーション | 千金美穂/著 | 356-02 |
| 3 | ぬいぐるみ・おもちゃ | コッペ平沢/著 | 356-03 |
| 4 | ランチとおやつ | 大森いく子/著 | 356-04 |
| 5 | 通園グッズ | 島田明美/著 | 356-05 |
| 6 | つくってね あそんでね | 島田明美/著 | 356-06 |
| 7 | つくってね あそんでね パート2 | 島田明美/著 | 356-07 |
| 8 | イベントおしらせデコレーション | 千金美穂・尾田芳子/共著 | 356-08 |
| 9 | 動く紙おもちゃ | 黒須和清/著 | 356-09 |
| 10 | 工作ランド | K&B/著 | 356-10 |

新刊

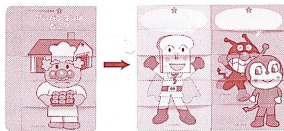


手づくりアンパンマンがいっぱい 10

工作ランド

シリーズの10巻目は、みんなであそべる工作特集です。
作り方・型紙・「アンパンマンのふしぎ絵本」付き。
乳児から大人までが楽しめるボリューム満点の内容です。

＜アンパンマンのふしぎ絵本＞



綴じ込み頁のカードを切って組み立てるだけで、簡単に絵本ができます。頁の開き方で場面が変わる、ふしぎな絵本です。吹き出しの中に、おはなしを入れれば、繰り返し何度でもあそべます。

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第107巻 第1号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第107巻 第1号

もくじ

巻頭言

世界にとつてどうでもいい仕事

佐々木宏子

特集

生活を保育へ Vol.5

— 「危ない」を知るといふこと —

幼児の安心と自立の関係

森田ゆり

「自ら考えて、判断して、行動できる力」をはぐくむ

伊集院理子

保育園生活の中で

濱口敦子

「危ない」を学ぶ

みよしのりえ



26 20 15 8 4

「ぼくも一緒に考えさせてもらおうか」 津守 眞

幼稚園と音場の話 林 健造

観察者と保育者の対話 (10) 菊地知子・中村恵子

上海⇄東京 子育てメール便 (1) 橋本雅子・津守多実

子どもと保育の情景 (13)

戸田雅美

「表現」が生まれる「場」

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (13)

いずみナーサリーの今までとこれから

中澤智子



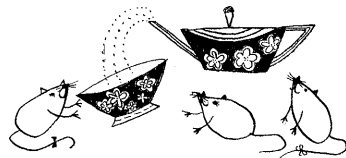
世界にとってどうでもいいのか仕事

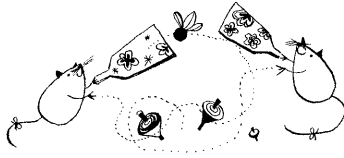
佐々木宏子

去る八月に、水木しげるの自伝的漫画が原作であるドラマ「鬼太郎が見た玉碎く水木しげるの戦争」がNHKスペシャルとして放映された。

そのドラマに水木しげる役で出演した俳優の香川照之氏が、朝日新聞のインタビューに応え、大変興味深い発言をしているのに出合った。彼は、役者としての抱負を尋ねられたとき「ない」と即答し、「世界にとってどうでもいい仕事が残続し、役を頂いていることが奇跡なんですよ。サラリーマンのように働きたいです」と、語っていた。

私は、香川照之主演のこのドラマを見たが、太平洋戦争下において戦うべき思想も理念も見つけれないままに、強力な権力組織と軍事力だけを与え





られた指揮官の、とりあえずは自己の優位性を誇示するためにだけに行使する暴力や残忍で非人間的行為を、鋭く静かに描いた秀作であった。

香川さんが「どうでもいい仕事」と言ったのは、当然のことながらこの作品に役を得たことではなく、彼自身の「俳優」という仕事が現代社会において遇される意味であることは言うまでもない。

Ⅰ 丁機器の開発が引きずり出す情報

過剰に発達したマスメディアが流し続ける情報は、伝統的な紙媒体である大衆娯楽雑誌・週刊誌・スポーツ新聞やテレビは言うにおよばず、電子機器がパソコンや携帯電話に多種多様な機能を付加し、情報流通のための新商品が生み出されるたびに爆発的に増えていった。

その結果、俳優・モデル・歌手などと呼ばれるいわゆる芸能人たちは消費しつくされ、歴史的に積み上げられてきたプロフェッショナルな領域は、「どうでもいい仕事」の中で溶解・分解されてしまったのではなからうか。

映像や音声の情報伝達手段がハード面では高度に発達したにもかかわらず、その中に流すべきソフトは創造できず、人々の暮らしにとって、どうで

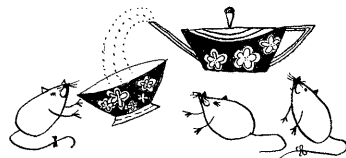
もいい情報が、とびきりのけたたましい映像とテキストで二十四時間にわたってまき散らされる。

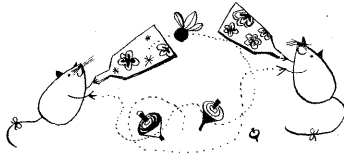
戦後、急速に発達したわが国の市場経済は、それが人間や人類にとって意味があるがなからうが、商品として売れるものを生み出すために「世界にとつてどうでもいい仕事」を開発し増やし続けてきた結果、ポストモダンと名づけられた社会の中で私たちは立ち往生している。

幼児教育におけるもう一つの環境問題

特にわが国の大都市においては、子どもたちを取り巻く環境は人工的なもので埋め尽くされ、とりわけ「世界にとつてどうでもいい仕事」がつくり出した情報や商品が、子どもたちの精神世界に大きな影響を与えている。子どもたちは幼いときからそれらの人工的情報環境をあたかも自然環境と同じように受け止め、その中にくるみ込まれ呼吸している。

人間が自然の一部であることなど、どこを探しても実感できるものはない、大人たちが必死で与えようとする自然体験は悲しいほど細切れになっている。





私は情報を統制したり、情報に優劣をつけたりして法的な規制を加えることを主張しているのではない。そうではなく、子ども（人間）たちが幸福に生きるとはどのようなことなのか、そのために必要な環境や情報とは何かを冷静に考えてみようと言っているのである。幼児教育のみならず、学校教育でさえ少子化の中で売れ筋の商品として競争原理に支配され、その結果、多くの若い人たちにとって、子どもを産み育てることは人生にとって「どうでもいい仕事」になってしまった。

私たち幼児教育に携わる者は、自分たちに要求される仕事は「世界にとつてどうでもいい仕事」の水脈とつながってはいないかを、今一度冷静に点検する必要があるだろう。幼児教育理論も商品の一つとして、絶えずマスマディアが火をつけブームを起こし、やがて消費されて消えていく。研究者の研究テーマも、そのような流行の波乗りになってはいないだろうか。

いつの時代にあっても、保育・教育の仕事は重要な役割を果たすものであると信じられているが、果たしてそうなのか。「情報戦争」下にある私たちは再考する必要があるだろう。

（環太平洋大学）

幼児の安心と自立の関係

森田 ゆり



小さな赤ちゃんが誕生しました。十か月間の母親の子宮内の羊水に温かく保護されてきたのですが、
時が満ちました。距離にすればほんの十センチぐらいの産道を何時間もかけて出てくる行程は、たった一人です。傷だらけになりながら進む長くて孤独な旅です。

「オギャー」と元気のよい産声が上がります。「ウエル

カム！」と赤ちゃんは周りにいる人たちにしっかりと抱かれ、ほおずりをされ、笑いかけられます。
これは、多くの人にとっての、自分が無条件に丸ごと受け入れられる最初の体験場面です。そのとき人は「世界はわたしを受け入れてくれる」という自己存在への信頼感を身体に深く記憶し、「世界は信頼に足るところだ」との希望を刻印されて、社会的

存在としての人間の生の確かな一歩を歩み出すのです。

赤ちゃんは、自分に向けられた温かい声、自分の存在を喜ぶ言葉を聞き、ほおずりされ、抱擁されることで深く安心します。目と目が合い、笑いかけられ、「見捨てられたり、置き去りにされることはない」と言葉をかけられることでさらに安心します。

人間の自立の第一歩は、こうして条件抜きで肯定されるという安心な関係を土台にして始まります。

「自立」は自ら立つと書きますが、人が自ら立つためには、足をしっかりと踏ん張れる揺らがらない土台が必要です。この土台は、身近な大人たちから無条件に受容され愛されるという安心な関係なのです。

モリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』（じんぐうてるお やく・富山房）は絵本の最高傑作の一つとして、長年にわたって世界中の

子どもたちに読み続けられています。この絵本には、安心と自立の関係が実にしっかりと描かれています。

幼児がこの絵本を何度も何度も「読んで」とねだるのは、躍動を感じさせるユニークな絵が子どもたちの目をしっかりとらえるばかりではなく、このお話に貫かれている「安心」ゆえだと思うのです。

マックスは、大変な問題行動（オオカミのぬいぐるみを着て大暴れ）をして親に罰せられます。食事抜きで部屋に閉じ込められるのは幼児にとってはかなり厳しい懲罰です。しかし、マックスと親の間には基本的な安心感があるからこそ、寝室に閉じ込められても、おびえたり、引きこもってしまったりすることなく、一人で無意識の海に乗り込んで、大冒険をしかす自律心もち得るわけです。大冒険（で大暴れした後に家に帰ると、そこには温かい夕飯が待っていた。すなわち、自我の形成を支える安心

の世界に帰っていったのです。

この安心感のことを、「子どもの発達心理学の分野では「基本的信頼」と呼んでいます。

「子どもの自立心を育てよう」と、よく言われます。でも、どうしたら自立心は育つのでしょうか。小さいときから西洋風に一人だけ個室で寝かせ、孤独に耐えさせると自立心が育つのでしょうか。「がんばれ、がんばれ」と叱咤激励をすることでしょうか。

子どもであれ、大人であれ、自立心を体得するために、まず何よりも必要なものは安心の心です。「私」をありのままに受け入れてくれる安心な関係、またはその記憶です。

先ほどの絵本の主人公ママックスが、厳しいお仕置きを受けて寝室に閉じ込められても、たった一人で大冒険に出かける自立心もち得るのは、温かい夕飯が待っているように、安心して戻ってこられる関

係があるからなのでしょう。

安心の土台を傷つける外からの力

人はみな生まれながらにさまざまなたくさんのパワーをもって生まれてきます。そのパワーとは、生き続けようとする生理的な生命力であり、みずみずしい個性であり、それぞれの感性であり、可能性です。障害があろうがなからうが、男だろが女だろが、何国人であろうが、誰もがみなそれぞれの代替不可能なかけがえのなさをもって生まれてくるのです。

あなたと同じ人間は、人類の歴史に二度と存在しないというその理由ゆえに、あなたは、ただあるがままで尊重され大切にされなければならない、あまりに尊い存在です。人より抜きんでて優れているから尊重されるのではなく、目鼻立ちが整っているから称賛されるのではなく、親の期待どおりだから大

切にされるのではなく、頑張るから偉い人なのではなく、あなたはあがまままで、すでにもう充分に尊いのです。

しかし残念なことに、現実にはこのような安心の関係には程遠い、不安と恐れの関係にさらされていく子どもたちは少なくありません。

Aちゃんの母親は、三年間ほど同居していた姑との関係がうまくいかず、そのストレスで心理的に追いつめられ、Aちゃんのすることなすことが気に触つてならず、当たり散らしてばかりいました。そのため、Aちゃんには情緒不安定な症状がいくつも現れています。三歳にして壁に自分の頭をがながんとぶつけていら立ちを表現したり、怖い夢にうなされて叫び声を上げたりすることがよくあります。

Bくんの場合は、多動傾向が強く、三歳違いで生まれた妹をたたいたり、突いたりすることがよくあるので、親はBくんの存在がうとましく、この子さ

えいなければ…と人生をもう一度リセットしたいとばかり思いつめています。

Cくんの場合は、男子をきつちりとしつけるためには、体罰もときには必要と考える父親から怒鳴られ、殴られることが多く、けがをさせられたこともあります。

Dちゃんの場合は、四歳のときからベビーカーに何度も性的な行為をされているのですが、それを親に言えないでいます。五歳になると自分がされていることを近くの年下のいところにもするようになりました。

いずれの子どもたちも、自立の土台となる安心な関係が揺らいでいます。自分の力を育てて大きくしてくれる安心な関係ではなく、逆に、自分のパワーを傷つける外からの力にさらされているのです。

でも大丈夫です。今からでも、傷つけられ奪われた力を取り戻すことができます。

心の応急手当て

道端で子どもが大けがをしていたら、たまたま通りかかった人でも、血を止める、傷口を水で洗うなどの手当てをし、必要があれば救急車を呼ぶでしょう。なるべく早くに施されたちよつとしたこの応急手当てが、その後の回復を左右するほど重要であることは言うまでもありません。

虐待やいじめ、その他の暴力などによって安心の土台が揺らいでいる子どもたちは、身体の外傷の大小にかかわらず、大きな心の傷を負っています。この心の傷も早急には手当てが施されなければなりません。しかし、心の傷は目に見えないために気がついてもらえず、放置されていることが大半です。手当てをしないで放置されているために、取り返しのつかない深い傷になってさまざまな問題が発生してしまいます。

日本の「応急手当て」が素晴らしいのは、本当に手の力を使うことだけでなく、おまじないの言葉が伴うことにもあります。小さな子どもが転んでひざこぞうから血を出したとき、あなたはどんな言葉をかけながら手当てをしますか。

沖繩では、「まぶい まぶい まぶいが おつちたー」と言うそうです。

日本中どこでも使われているのは、「ちちんぶい ぶいぶい いたいの いたいの お山のむこうにとんでいけー」ですが、このおまじないの言葉が、実はとても大切な「心の応急手当て」のエッセンスを伝えていることに気がきました。

「ちちんぶいぶいぶい いたいの いたいの」は子どもの痛みや恐怖や不安に、「いたかったね」「それはこわいね」「かなしいねえ」と、どこまでも共感してあげることです。そして「お山のむこうにとんでいけー」は、どんなに怖くても、もう大丈夫だ

よ、きつと痛みはなくなるから、今は八方ふさがりでも必ず光が差してくるよ、と希望を与える言葉がけなのです。この二つをすることこそ、人が本来もつ自己治癒力を活性化する心の応急手当てにはかかりません。

「手当て」という日本語には深い叡智が込められています。たとえ消毒液がなくなるとも、最新の特効薬がなくなるとも、手を当ててもらふことで、傷ついた子どももの心身の回復は大きく促進されます。それはきつと、手に込められた相手の優しさと、心配りと、自分を大切に扱ってくれるその心と気が、子どもの中の自己治癒力を発揮させてくれるからなのでしょう。

聴くことのパワー

手当ての具体的な方法は「聴く」ことです。何があったのか事実関係を「尋ねる」ではなく、上の空

で「聞く」ではなく、あなたの耳と心をもって、相手の十四の心を聴くことです。これは本来のこの漢字の由来ではないのですが、「聴く」という漢字はそう書いてあるように見えませんか？ 相手のさまざまに乱れ、相反する、人に語ってもわかかってはもらえないと思っている「十四」もの異なった気持ちを、助言をするのでもなく、分析をするのでもなく、ただ「そうなんだ」「それはつらいよね」と聴くという共感的傾聴です。

被害を受けている子どもたちは、そのような聴き方をしてくれる人にしか、虐待されていることを話しません。

タバコの火を押し付ける恐ろしい父親、でも機嫌のいいときはキャッチボールをしてくれる。だから父は怖いけれど楽しい。ストレスがたまると僕をなぐる母、でもたいていは優しいから大切な人。こうした相矛盾する感情を抱えていることが被虐待児の

典型的な心理です。だから、相手の語ることを否定せず、分析せず、助言をせず、同情せずに、ただ共感して相手の感情を認めてあげること、これが「聴く」という共感的傾聴です。

虐待にとどまらず、いじめや性被害など、さまざまに「聴く」という心の手当てをする。決して難しいことではありません。人の痛みと恐怖に共感する心と、安易には同情しない姿勢と、子どものもつ回復力への信頼と、ほんのちよつとの勇気があれば、誰でもができるはずです。

腹立ちも、悔しさも、怖さも、最後までその気持ちに共感しつつ聴いてもらうだけで、驚くほど収まっていきます。安心の土台がぐらついている子どもが最も必要としているのは、自分の気持ちを認めて尊重してくれる人、自分のことを気にかけてくれる大人の存在です。聴いてくれる大人に出会えたか

否かが、その後のその子の人生を左右する決定的な要因となるのです。

「聴く」ことは、あなたが子どもにあげることのできる最大の贈り物です。

「いちばん悲しいときは

気持ちがわかつてもらえないとき

いちばんうれしいときは

気持ちが通じ合えたとき

いろいろな気持ちがある　あなた

そのままのあなたで　いいんだよ。

いろいろな気持ちを大切にして

ぐんぐん大きく　しあわせになる。」

『気持ちの本』（森田ゆり著　童話館）より

（エンパワメント・センター主宰）

「自ら考えて、

判断して、

行動できる力」をはぐくむ

伊集院理子



最近のテレビのニュースでは、耳を疑うような恐

ろしい事件についての報道が行われない日がないのでは…と思うほどです。私たちが子どものころには、たまに怖い事件があっても、それは自分たちには関与しない特別なこととして心の隅に置いておくことができました。しかし、現在は、いつ自分の身、自分のごく周囲にいる人の身に降りかかってくるかもしれないことなのです。

そのような世の中になってしまった今、私たち子どものすぐ傍らに生活する者は、子どもたちが安全に暮らしていけるようにするためには、どのようにしていったらいいのか、これまで以上に真剣に考え

ていかなければなりません。

個人面談をしていたときのこと、ある一人の親から質問を受けました。「今、知らない人にはついていかない、ということ伝えているだけではすまない世の中になっている。顔見知りの人でも、何をされるかわからない。しかし、知人も疑え、ということとを、小さい子どもに伝えていくことはどうなのか。子どもの安全を守るためには、そういうことにも配慮していかなければいけないのだろうか。先生はどう考えるか」という内容でした。思ってもいなかった質問に、「人を疑うようなことを子どもに教えることは望ましいことではないと思う」というよ

うなことを咄嗟に伝えてはみたものの、自分が口にした言葉がごくありきたりな説得力に乏しいもので、親が求めていたことに対して十分に応え切れていないというもどかしさが深く残りました。

そのときは充分伝え切れませんでした。少し落ち着いて考えてみると、こんな世の中だけれど、人を疑うことから始めてしまったら、何も生み出せないのではないかと。どんな世の中でも、やはり、周りに存在する人を信じることからしか子どもたちの安心、安定は生み出されない。そのことを、もっと伝えることができたならばよかったのにと深く反省した次第です。

さて、「危ないを知る」というテーマについて考えを巡らしているうちに、子どもたちにとって「危ないを知る」前に、まず「安心を知る」「安全を知ること」が大事ではないかという考えに至りました。

園生活が安全で安心な場となるためには、園内へ

の出入り管理、固定遊具の点検といった生活環境の整備・配慮といったハード面にとどまらず、そこで子どもたちが安心して自分らしさを発揮して生活することができるようにしていくことが、とても大事だと考えます。

なぜならば、ハード面が完璧であっても、その中に子どもたちをじっとさせておくわけにはいかないからです。園においては、活動の主人公は子どもたちで、子どもたち自身が自分の身体を使って環境にかかわる中で、いろいろな身体の動きを試してみることがあります。そうした行為を通して、うまくいったり、いかなかったりもたくさん体験しながら、自分自身で判断して身体の動きや行動を調整していけるようになっていくことが、まず大事です。そのためにも、園は、遊びの中で、子どもが安心して自分を試しながら活動できる場となっていることが何よりも必要なことでしょう。そのことを抜きには、子どもたちの安全は確保されないのではないかと

と考えます。

私たちの園で保育を公開するとき、参観者からよく受ける質問は、「園庭の遊具の周りに保育者がいなかったが、事故はないのか?」「園庭の高台の部分は、子どもたちしかなかったが、それで大丈夫なのか?」「お遊戯室で、子どもたちだけで子どもたちの背よりずっと高く積み木を積んで、そこに乗っていたが大丈夫なのか?」といったものです。現場においては、「事故があつてはならない」ということは鉄則であり、それは、現場で子どもたちを守りはぐくむ私たちが真剣に追究しなくてははいけないことです。

しかし、事故があつてはならないからといって、危ない物、危ないことから、子どもたちを囲ってしまつたり、子どもたちが試してみる前から、「積み木は何段までしか積んではいけません」「保育者のいないところでは、固定遊具は使つてはいけません」という大人サイドのルールを子どもたちの中に

徹底させていくことは、子どもたち自身が自分で危ないことを感じたり、危ないことを避け、危なくない方法を探していく機会を奪っていくことになるのではないのでしょうか。自分で試してみても、自分の身体と心で「どうしたら、安全か?」を感じとることが、幼児期にはとても重要だと考えます。自分の身体を使つて試してみても、「自ら考え、判断し、行動できる」力をはぐくんでいくことが、自分の身を守る子ども、自分の身だけではなく周りの人の身についても考えられる子どもにつながっていきます。

次に、子どもたちの事例を挙げ、自分の身体を使つて自分で考えて調整するようになっていく子どもたちの姿を見ていきます。

A夫は、園に入る前の体験の少なさが見てとれるようで、とても動きがぎこちなく、脚力も目立つて弱い子どもでした。四歳児の春、園庭の高台のログハウスの上に、保育者と数人の子ともたちで登つた

ときのことです。ほかの子どもたちは、さっさと登って、一番上に座っているのに、A夫は、三段目ぐらいの所で、もう腰が引けて動きが止まってしまっていました。すると、B子がすつとログハウスの上から降りて、A夫の一段下に位置し、「B子がいるから大丈夫だから」と言って、A夫が安心してもっと上の段に登れるように助けようとしてくれました。B子にそう言われて、A夫もおっかなびっくりですが、一番上に手が届く所まで到達することができたのです。でも、自分から「もう、ここでもいい」と言って、上の段に座るまでには至りませんでした。

自分の力と相談しながら、自分の身体の動きを調整して、自分なりに挑戦して上を目指したA夫。それを支えたのはB子の行動でした。一段下に誰かがいてあげたら、A夫が落ちないと思って安心するだろう…とB子は自分で判断して、そういう行動をとってくれたのです。

次の事例は、三歳児の子どもたちと防災訓練をしたときの一人の子どもの姿です。地震が起きてその後火事が発生したという想定で、各自に防災頭巾をかぶらせて、園外まで避難するという訓練でした。

C夫は一度「こうしたい」と思ったら、何を言われても、泣いたり叫んだりしてその思いを何としても行使しようとするような子でした。C夫としては、「もっと遊んでいたい」という思いから、朝から新聞紙で剣を作ろうと思っていたことを思い出して、防災頭巾はかぶらずに、新聞紙を手にして「新聞紙をかぶる」と主張しました。

子どもたちを迅速に避難させなくてはいけないという状況で、担任はC夫のことはT・T（ティーム・ティーチング）の保育者に任せて、子どもたちの誘導を優先させました。T・Tの保育者は担任の動きを察知して、残されたC夫にすぐにかかわってくれました。T・Tの保育者が「逃げよう」と何度も誘うと、C夫は自分から「ちょっと待って！ 考え

る！」と言って、その場にしゃがみました。

そのC夫の言動から、これまでとは違って自分なりに歩み寄ってどうにかしようとしていることが伝わってきて、T・Tの保育者は少し待ってみることにしたのです。C夫は、しゃがんで考えるという間を得て、「やっぱり行く」という結論を自分で導き出しました。C夫を励ましつつ移動する道すがら、T・Tの保育者は防災頭巾をかぶるようにC夫に伝えますが、C夫は簡単には頭巾をかぶろうとしませんでした。そのC夫を変えたのは、五歳児のD夫の言葉でした。「あつ、あの子、防災頭巾、かぶっていない！ 危ないからかぶらないとだめだよ」。すぐにはかぶろうとしないC夫に、D夫は何度も声をかけてくれました。そのうち、「やっぱりかぶる」と言って、やっと頭巾をかぶってC夫は自分のクラスの列に加わったのです。

この事例から、そのときの状況を受け入れ、自分なりに判断してそこに参加していく子どもの姿が読

み取れます。

最初の事例のような、ごくごく日常的に展開されている一つひとつの積み重ね、子ども同士のやりとりが、子どもたちの「自ら考え、判断し、行動できる」力に何よりもつながっていくのだと考えます。

二つ目の事例は、日常とは少し違う防災訓練の日の出来事でしたが、その中でも、子どもたちなりに考える余地を与える保育者の働きかけとともに、モデルになる行動をしながらの年長児の働きかけが、年少の子どもの「自ら考え、判断し、行動できる」力を引き出していったのだと考えます。また、そのようなことを可能にしたのは、園の職員の連携体制に負うところが大きかったといえます。このような特別な訓練のときだけではなく、日常的な職員同士の連携が、子どもたちの安全確保のために必須のことであることも、この事例は教えてくれています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

保育園生活の中で

濱口敦子



私的なことではありますが、私は今生まれて初めて妊婦生活を送っており、産休を目前にしてこの原稿に向かっています。妊娠八か月ともなると、おなかの赤ちゃんもかなり活発になり、まだ千四百グラム程度の小さな身体を懸命に動かしてポコポコとおなかを蹴ってくる毎日です。保育中におなかが大きく動いたときに、そのことを子どもたちに伝えるところ、担当している二歳児の子どもたちが顔全体をお日様のように輝かせて、

「赤ちゃん動いたの？」

と言いながら、優しくおなかをなでてくれました。

そして、その時本当におなかが動いた瞬間に出合えた子どもたちは、息をのむように感動し、その日以来毎日のように、

「赤ちゃん動いてる？」

「赤ちゃんもう出てきた？」

「赤ちゃんの名前、もう決まった？」

「○○ちゃんのおなかの中にも、赤ちゃんいるんだよ」

と、次から次に、うれしい質問やユニークな発想を聞かせてくれるようになりました。そして、おなかが大きくなり、動きがゆつくりになっていく私をい

たわって、

「これ持つてあげる」

「布たたむの手伝ってあげる」

と、手伝いを申し出てくれたり、

「ここは滑るからゆっくり歩いてね」

などと、大人のしぐさや口調をまねして危険がないように伝えてくれることもありました。私はそのよ
うな言葉を聞かされたたびに、生命の誕生を楽しみにして
くれる小さなお兄ちゃんやお姉ちゃんたちの優しさ
を感じ、熱い思いがこみ上げました。そして、新し
い生命を迎え入れる子どもたちの「愛」は、一人の
保育者としてもこの上なくうれしく、初めて母親に
なるうとして一人の女性としても大きな励みとな
りました。素敵なサポーターに応援されながら妊
婦生活を送れたことは、きっとこれから迎える出産
時の力強い支えとなることでしょう。

このような愛をいっぱい受けている当の赤ちゃん
ですが、力強くおなかを蹴って元気にしている一方
では、まだまだ十分に安全な環境の中で守られなけ
ればならない存在でもあります。私が仕事で疲れて
いるときには赤ちゃんにもそのことが伝わるよう
で、夕方になると、よくおなかを張って、休息を必
要とすることがあります。羊水に守られながらも居
心地の良さや悪さを敏感に感じて、

「お母さん、もう少しゆったり過ごして！」

とサインを送ってくるのでしよう。このことから、
まだ本能的な反応ではありながらも、もうすでに快
や不快を身につけていく「危ないを知る」「危なく
ないを知る」力へとつながっていくのかもしれないま
せん。

さて、ようやく本題の「危ないを知る」に入りた

いと思います。

保育園での生活、その中でもとりわけ乳児クラスといわれる〇歳児から二歳児までのクラスにおける生活は、安全な環境の中で営まれることが、保育を行う上での基本的な条件になっています。安全な環境が整えられ、その状態が保たれているからこそ、遊びや食事、睡眠といった日常生活が安心して送れるからです。そのような点から見ると、人として誕生した後もまだしばらくは、お母さんの羊水の中とまではいかずとも、居心地のよい環境が保障されなければならぬ対象だということになります。

それでも、もう外界に飛び出してきたのですから、全てがふわふわの綿に包まれたような生活というわけにはいきませんので、私たち保育者は、成長に応じた伝え方で子どもたちが自ら危ないことをキヤッチできる感覚を育てていかなければなりません。

ん。その感覚の育ちを促す配慮は後でお伝えすることにし、まずは私が勤めている保育園で取り組んでいる安全な環境づくりについて触れてみます。

私の保育園では、子どもたちが安全な環境の中で安心して生活できるように、危険防止のためのチェックリストが作成されています。その内容は、看護師を中心に各クラスで検討され、成長や発達に応じた視点から考えられています。もちろん、この取り組みはチェックしただけで満足するのではなく、日ごろから保育者の気配りするべきポイントを文章化することで、経験豊富な保育者から経験の浅い保育者までが共通の認識の下に、子どもの安全を守りながらより丁寧な保育を展開していくことが目的になっています。

その一例として、私が担当している二歳児のクラスでのチェックリスト五十項目の中からいくつかを

ピックアップしてみます。

(1) 基本的なハード面

・室内、室外で角や鋭い部分にはガードをしてある。

・ロッカーや棚は、倒れないように固定されている。

(2) 保育者が把握しておくべき点

・子どもの遊んでいる位置を確認している。

・常に子どもの人数を把握している。

・ドアを開閉するときは、子どもの手や足の位置を確認している。

・子どもが大きな物を持つときは、見守りながら段差や地面の状態を把握している。

(3) 子どもの発達段階を考慮しての配慮

・午睡後、十分に覚醒してから活動に移っている。

・おのおの子どもが、自分の足に合ったサイズの靴を履いている。

・食べ物の固さや大きさ、一口量はその子に合ったものである。

以上のように、本当に基本的な内容ではありませんが、これらの基本的事項を共通の認識の中でクリアしていることが、より質の高い保育を見通していく助けになるのです。(1)のハード面は、日常保育の危険防止にとどまらず、災害時の被害防止にもつながり、(2)の保育者側の配慮についても、日ごろから意識的に行うことで、保育者自身に全体の把握をする力が身につくとき、いつもと違う状況が生まれたときにもすぐに気がつける目や感性が養われていくようになります。そして、特に(3)の子どもの発達段階を考慮しての配慮という視点は、保育の内容にも直接かわってくる重要な内容で、年齢ごとに一番差が出て

くる内容になります。

たとえば、「午睡後、十分覚醒してから活動に移っている」というのも、まだ歩行が安定していない子どもを十分な覚醒を待たずに起こしてしまうと、排泄や着脱行為に対して能動的になり難い上に、不必要な転倒を引き起こしてしまう可能性があります。また、「食べ物の固さや大きさ、一口量はその子に合ったものである」というのも、大人の介助を離れてほぼ自分で食べられるようになった二歳児くらいの子には、注意して見ていく必要がある点です。大人の援助なしでも適量を口に運び、しっかりと飲んで食べられるかなど、食事における自立は、同時に食事中に起こり得る事故を防ぐことにもつながるのです。

このように、危険防止に対する大人の意識を深めていく中で、保育環境の安全対策が確立し、さらに

保育者の保育や子どもに対する注意力や認識力を高め、それが子どもにとって「育ちに合った環境の中で、のびのびと生活できる」ものとなるのです。

では最後に、先に触れた「子どもたちが自ら危ないことをキャッチできる感覚を育てていく」という点については、どのような配慮がなされているのか紹介したいと思います。

私の保育園では、〇歳児の離乳食の時点から、食事に使われる食器は全て陶器を使用しています。子どもが扱うと割れる心配があるからといってプラスチックの食器を用意するのではなく、あえて本物の素材を使用することで、丁寧に作られた家庭的な食事を、そのままの温かさや愛情を保たせながら子どもたちの前に出すことが可能であり、そのことは毎回の食事を大切にいただく心を育てることもなります。そして、ゆつたりとした心地で食事に向か

えることで、食器の扱いも自然と丁寧になり、子どもであつても食器を割るようなことはほとんど見受けられないという状況になるのです。

もちろん、子どもが丁寧に食器を取り扱えるようになるためには、離乳食の移行期以降も、子どもの自食行為がある程度身につくまで保育者と子どもとが一对一で食事を食べるようにし、その間に栄養以上の愛情も込めながら丁寧なかかわりをする事が前提にあることは言及しておかなければなりません。保育者と子どもとの間に培われた食事上の信頼関係は、表面的なマナーにとどまることなく、心から食事を楽しみ、料理や食器を大切にすることも自然とわかせてくれるのでしょうか。

つまり、陶器を使う目的は「陶器は割れると危ない。丁寧に扱おう」ということを知らせるためではなく、むしろ「割れる素材ではあるけれど、丁寧に

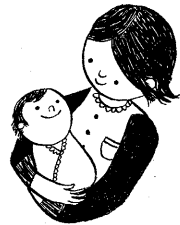
扱えば、よりおいしい食事を楽しむことができる」「食事室の人が丁寧に作ってくれたご飯を温かいまま食べられる食器を使えてうれしい」という発想から、正しい扱い方を伝えていくことにあるのです。

以上の実践を通して私が感じていることは、子どもが「危ないを知る」前提には「危なくないを知る」ことが必要なのではないかということです。危ない環境をキヤッチする感覚というのは、安全な環境に身をおいて、その中で安心して過ごすときに育つプラスの感覚なしにしては正しく作用しないのではないかと思うのです。そういう点から考えても、私たち保育者は、子どもに日々の保育の中で本物のよさを伝え、さまざまな本物の体験を提起し、子どもたちが五感を豊かに発揮して、研ぎ澄まされた感覚や美しい感性を養う手伝いをしていく貴重な役割であるといえるのでしょうか。

(かしのき保育園)

「危ない」を学ぶ

みよしのりえ



「危ないからやめなさい」

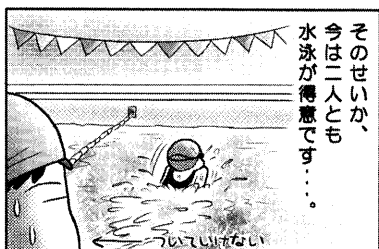
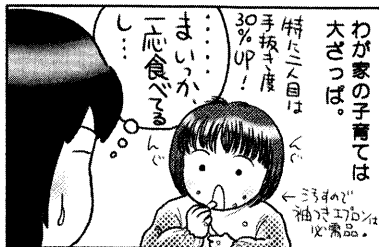
子どもを一人育てあげる過程で、世の親たちはいつたい何度、この言葉をわが子に向かって投げかけるのでしょうか。

現在、中学二年生と小学五年生の二人の娘をもつ私もまた例外ではなく、ことに幼少期には、かなり頻繁にこの言葉を使っていました。はいはいを始めた生後六か月ごろには、落ちている物を手当たりしだいに口にするわが子に、よちよちと歩き始めた十か月ほどの時分には、裸足で玄関のタタキへと突き進んでいくわが子に対して……というふうには。

子どもたちがだいぶ大きくなった現在では、かなり頻度は減りましたが、それでも時どきはこの言葉を使います。

「危ないよ」と声をかけることは、わが子を危険から回避させようとする、親として当然の行為であり、ごく自然に発せられる言葉です。世の中に未知のことだらけの子どもに、何が危険で何が安全かを教えることは、人間に限らず、地上に生を営む動物たち、皆それぞれ何らかの手段を使って行ってきたことです。それは、種の存続を担う動物の本能ですから。

思わぬ副作用



水が大好き過ぎて、水たまりでも泳ぐ時には開口はしたが...

体験から学ぶ

目の前にある危険は、遠ざけたい。

誰もがもつて当然の感情なのですが、子育てにおいては、遠ざけるばかりで果たしてよいのかと、疑問に思うことがよくあります。

動物というものは程度の差はあれ学習能力をもっているものですが、実体験なしにその対象について

学ぶことができるのは、人間だけでしょう。言い換えれば、机上で学習ができるのは人間の特権であるということですが。

しかし、その特権も、乳幼児期にはまだ充分に振ることができません。

つまり、この時期の子どもが学習をするためには、実体験が伴わないとならないわけです。この実体験が必要である乳幼児の時期こそ、その後に関

わが子はアーティスト？



普段、あまりハサミを使わせてもらえないようです…。

学童期・思春期・成人期における危険回避能力の礎になると私は考えます。

たとえば、歩き始めたばかりの一歳児は、まだ足がふらついて危なっかしいもので、親としては「何とか転ばないように」と願うものですが、転ばないようにするためには、まず転ぶことから学ぶ必要があります。何度も転んで転んで、痛さを知り、そうならないような歩き方を自分自身で会得しなくては

なりません。

冒頭で、私自身「危ないから」という言葉を連発してきた、と述べましたが、あいにくと私の娘たちは、親の言うことを素直に聞き入れる子どもではありませんので、こんなとき、「階段の方へ行っちゃダメよ」などと声をかけても、彼女らは振り向きもしません。階段へまっしぐらです。結果、娘らは生傷の絶えない幼少期を過ごすことになりました

た。私のほうも、追いかけるのに限界を感じ、よほど危険がない限りは、木に登っていようが水たまりで腹ばいになっていようが、あきらめモードで傍観するようになりました。

しかし、そうして失敗とそれに伴う痛みとを幾度となく味わってきた子どもたちは、その分、自分自身はもちろん、他人の痛みへの理解力も培ってきたように思います。まだ成長半ばであり、相変わらず親の言うことは素直には聞きませんが、その点では真っ直ぐ育つてくれていると信じています。

アメリカで感じたこと

ところが最近の親は、危ないものや汚いものを、子どもたちが近づく以前に取り除いてしまう傾向があるようです。

私たち家族は、数年前までアメリカの北東部に住

んでいました。

当時の隣の家には、私の下の娘と同年で三歳前後のお嬢さんがいたのですが、夏場はわが家の娘らが外で遊んでいると、すぐに出てきて一緒に遊んでいたものが、寒くなり始めたころから、ばったりと姿が見えなくなってしまったのです。病気でもしているのかと心配しましたが、暖かくなったころ再び遊びに来るようになり、ほっとして「冬の間はどうしていたの？」と尋ねてみると、「マミイが、寒いから外で遊んじゃダメって言うの」。その答えは意外なものでした。

確かに、冬はマイナス二十度になることもある寒冷地でした。しかし、零度前後に上がる日も多く、雪もほどよく降り、広い庭をもつ隣の家では、雪遊びには最適な環境です。それなのに外で遊べないというのは、ずいぶんともったいない話だなど思いました。それと同時に、せっかく四季のある土地にい

ながら、セントラルヒーティングの家の中には全く感じることをできない、凍りつくような冷たい空気を知らずに育つことが、何ともいびつに感じられてなりませんでした。

「最近の子どもはキレやすい」と言われ始めてから数年たちますが、「キレやすい」ことの裏側には、「忍耐力」や「危険回避能力」の欠如があるとうかがえます。この「忍耐力」にしろ「危険回避能力」にしろ、養うためにはまず、我慢したり危険に遭遇したりする場面が必要になります。しかし、たとえば先のアメリカ人の女の子の場合、「寒さに耐える」という、絶好のチャンスを失っています。

もちろん、生命が脅かされるような危険は避けなければなりません。親が必要以上に先回りして、行く道の小石を取り除くようなことは、子どもの成長には好ましくありません。

疑似体験の効用

「危ない」を知るためには体験が必要、と述べてきましたが、かといって安全を脅かすような危険にそうそうさらすわけにはいきません。幼児期以降にあまりに危険な目に遭うと、トラウマになってしまいう恐れもあります。そんなときに一役買うのが、「遊び」と「読み聞かせ」でしょう。

「遊び」では、特に大人数で一定のルールの下行う、ダイナミックな「集団遊び」が効果的だと思います。最近、子どもたちが集団遊びに興じる姿をあまり見かけなくなりました。しかし、たとえば「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」などは、「鬼にかまえる」恐怖感と、それにどう対処するか思案する過程、さらには克服できたときの達成感など、日常では得られないさまざまな体験をすることができそうです。TVゲームでも似たような体験ができそうです。

が、こちらは生身の人間相手ですから、気に食わない展開になつてもリセットボタンは押せませんし、走り回れば息も切れるし、誰かとぶつかれば痛みも感じます。まったく体験の種類が違います。

少子化が進み遊び場も少なくなつた今、集団遊びをする機会がなくなつてきているように思います。が、保育の場や子ども会活動などに積極的に取り入れられることを望みます。

一方、「読み聞かせ」での効用は、改めて言うまでもなく、お話の中に入って疑似体験ができることにあります。特に、「民話」「昔話」の力は絶大です。たとえば「かちかち山」では、子どもたちは火や水の恐ろしさを知ることができます。

また、よく知られていることですが、「昔話」には、危険回避や問題解決の方法が隠されています。鬼だの山姥だのに捕まり窮地に追い込まれた主人公が、機転を利かせて難を逃れるというお話は、痛快

であると同時に困難を乗り越える術を子どもたちに教えてくれます。

読み聞かせには、親と子が同じ時間を密接に共有できるという素晴らしい利点もあります。保育者に任せるだけでなく、ぜひ親子でも積極的に絵本を楽しんでほしいものです。

「危ない」を学ぶ。それは体験や疑似体験なくしては、実感として得られるものではありません。そして、幼少時に経験したことの多様さは、思春期以降の精神の柔軟さにつながっていくと思います。

また、物質的な豊かさや引き換えに、交通事故や犯罪といった不可抗力で起こる危険の増大した昨今、子どもから目を離さないことも重要である中、いかに子どもたちに「危ない」を学ばせるか、悩ましい課題であるとも思っています。

(イラストレーター)

「ぼくも一緒に考えさせてもらおうか」

—四十七年ぶりの長等幼稚園訪問—

津 守 眞

長等幼稚園最初の訪問

私が大津市の長等幼稚園を訪ねたのは、昭和三十五

(一九六〇)年だった。

そのころ、幼稚園で粘土というと、一人ずつ粘土板を配られ、課題を与えられて、机の上でお団子やへびを作るのが通常だった。私が見た長等幼稚園では違った。両手で抱えるくらいの大きな粘土の塊がホールの真ん中にドンと出してあった。子どもたちは木の枝や空き缶などを粘土に挿しこみ、部屋全体がモダンな生け花のようだった。何人もの子どもたちが部屋を出たり入ったりし

て昼の弁当まで活動は続いていた。私は思わず引きつけられて見ていた。

ひとクラス四十人もの子どもたちの、クラスを超えての活動だったので、どの子どもが参加したかを確かめるために、子どもの背中に背番号が貼りつけてあった。毎日それを記録し、遊びの様子を職員皆が話し合うとのことだった。ほかの部屋では同じようにクラスを超えて、ままごとやおうちごっこをしていた。子どもたちは大きなダイコンやニンジン、菜っ葉を自分の家から持って登園してきた。親が本物の野菜を持たせるのだという。先生たちの注ぐエネルギーは大変なものだったろう。

四十七年ぶりの訪問

二〇〇七年九月五日、私は四十七年ぶりにこの幼稚園を訪ねた。園舎は建て替えられていたし、そのころと同じ自由な保育の姿が見られるとは私は期待していなかった。むしろ、以前とは全く違っているのではないかと恐れていた。私が訪ねると、広いホールや保育室には子どもたちの活気ある声が響いていた。私が久しぶりに訪問するということで、この日は特に、八十八歳になる当時の今西孝子園長が私に会いに来てくださった。当時と変わらぬ張りのある声だった。

今西 ほんま、子どもは楽しいから幼稚園に来るのだから、何が楽しいのか見ようと思ひ、私は子どもをジッと見て、ほっといた。幼稚園には六領域というのがあつても、これで教育と言えるのかしらんと思つて、私は子どもが動くままにほっといた。砂場で山を作つて子ども

たちが遊んでいる。三、四人がうつむいて遊んでいる。ソーツと見に行ったら、子どもたちは水を流したその跡がどうなるかを見ていた。「掘つてみ」と子どもは言っていた。「水を入れてみ」と私は言つてしまった。「こつち水を入れてみ、あかん、また、水がなくなる」。水が砂に染み込んでしもうた。これが子どもが知つていく最初でしょ。これが日常の生活で、子どもの毎日の姿でしょ？ 未知数の中から知つていこうとすることが教育ではないか。これを子どもがどう見つけていくか。

関西弁は相手との受け答えが滑らかである。東京言葉にはない滑らかさがある。私はそのころ、大津の教育委員会会の指導主事だった河邊泉先生の話しぶりを思い出した。昭和三十五年五月二十八、二十九日に日本保育学会が大坂樟蔭女子大学で開催されたとき、大会が終わつて次の日に当時の学生さんたちと一緒に訪ねたのだった。そのときのこの幼稚園の大規模な活動に圧倒されたこと

は忘れない。今西先生が園長で、今日と変わらない話しぶりだった。今西先生の話は次から次へと続く。

河邊泉先生と今西先生

今西先生はポケットにメモ帳を入れていて、どの子が、毎日、何時、どこに行つてどうしたか、それがどう発展するか、継続するかどうかを書き留めた。先生たちも同様だった。私は子どもの目の前でメモをすることはしないから、この点は違うけれども覚えていられるように頭の中に刻む努力をする。また、帰つたらできるだけすぐに書き留める。

今西 子どもが登園して八時半になったら何をするかと決めて日課を進めること自体がそれでいいのか。それで子どもたちはいきいきしているかどうか、子ども自身が求めているものがなかったら、何も出てこないでしょ。次に粘土入れようか、石入れようか、あんなら何入れよ

うかと子どもは自分で考える。そこで先生が必要になる。そこに友達が出てくる。そういう生活を始めた。

私は子どもがわからなくなった。六領域とか何とか言つて、子どもが迷惑しているかもしれないし。河邊先生にそのことを話すと、「おもしろいこと考えたなあ。ほくも、そこまで考えたことなかったが、ほくも一緒に考えさせてもらおか」と答えが戻つてきて、そこからこの遊びの保育が始まったのです。

「ほくも一緒に考えさせてもらおか」という関西弁の力は大い。東京言葉だったら「その方針でチームを組んでみましょう」となるのだろうか、そのよそよそしさではない、ごく自然な会話である。

今西 それからいろんな材料を出したらどうか、場所を変えたり、色を変えたり、河邊先生の示唆を得て、環境のつくり方をほんとに考えた。「その小さな紙一枚をど

ここにおいて、どうしたらいいか。考えてごらん、どこにおいたら結果がどうなるか、子どもはどうするか、あった自身の研究や」と河邊先生に言われた。

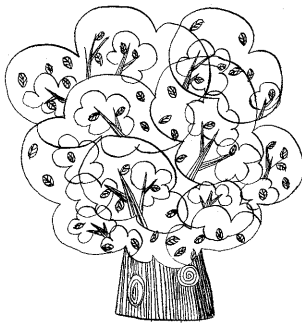
その後、現在の幼稚園の先生方も加わって、会話は更に続いた。私は関西弁では話せないから、ここでは、今西先生の話私の言葉で記すことにする。

子どもの見方に立って積み重ねられる遊びの保育

今西 大学を出た(ばかりの)人は、結果だけを見て、日常生活の積み重ねから出てくる行動を無視する。理論的に解釈して抽象的なものの言い方をして、内容の積み重ねの上に立たない。もたもたしたプロセスが省略されてしまう。はつきりとした結果がすぐに出ないことは大事にしない。そのとき、私は子どもがすることをジッと見ていたから、何年たってもそれは生きています。子どもが筋道を見つけていくのだから、早いこと大人が解

決してはいけない。

「ぼくら何してんの？」と子どもに聞いたなら、掘っても掘っても何も出てこない。何が出てくるかわからない。何も出てこない。子どももわからないから出てきてほしい。知りたい。子どもの何が出てくるか、光った石が出てくるかもしれない。黒い石かもしれない。そのときには何も出てこない。私にも、何が出てくるかわからない。明日への望みがあるからこそ、今日は終わりにしよう。明日は思った。「足を突っ込む人がいると危ないから、砂穴は埋めとき」と言っている日は終わった。こういうことから毎日の保育は始まるのです。このことがわからないうちの先生に出会った子どもは気の毒です。そこがわかってから後の子は幸せです。



これまでやってきたことを、毎年のんびんだらりとやっているのでは、それは先生のこしらえごとです。子どもがワーツと喜んだときは、内容の善し悪しはわからないが、そこには子どもの感動がある。前進がある。そこには未知数の怖さや危険があるが、子ども自身が考えていく道筋があります。子どもが学び方を知っていくことを大事にする。そうしながら、自分なりの考えがわかっていきます。五歳でわかったことが、八歳になって確かになる。小学生になって幼児期のことを思い出すかどうかかわらないが、先生から教えられたことをやっていくのではなくて、自分でわかったことをするのだから確かです。幼少の連携と昔から言われるが、この点が重要なのではないのでしょうか。

砂場で穴を掘っていても、子どもはいろいろ違います。必ず子どもは何かを手もとに発見します。間違えてあっても、子どもは残念ではない。喜びながら残念がつていることがあります。あるときは自分が求めて失敗することもあるし、あるときは成功します。

私が新任のとき、あのぶらんこで遊んでいた子どもは、その後何した？ と河邊先生から聞かれました。その先生は子どもがしていたことを見ているだけで、何を楽しんでいたかを見ていなかったのです。その子どもはぶらんこをしていたのではなくて、遊びを見つけるためにぶらんこをしていたのでした。「明日そこを見てごらん」と河邊先生は言われた。

「だから、子どもは自分のクラスがあつてないようなものですよ」。私はこう言いながら、先生方は大変だと思つていた。子どもからもらうようにしたほうが与えるよりよい。次をどうするかという期待をもちながら子どもから教えてもらうのです。それを続けてやっていくことが難しい。

自分が実践してきたことはいつまでも色あせない

今西 今自分の園を見ていると、行動している今しか見えない。予想されない行動はハズレていると思う。今の若い人はハズレるのが嫌だから、予想したことはその

通りにしようと考え。あまり同じだったら研究の必要がなくなる。

今西先生の話は途絶えることがない。初期の天津では、先生たちに子どもから学ぼうとする姿勢があった。

今西 子どもは自分から方向転換をする力をもっているから、それを待つていれればよい。幼稚園ではこう指導しなさいと言ったら、このようにこしらえなさいということになる。こういう基本的なことこそ教えないといけない。葉っぱが黄色であったも、子どもには赤く見えるときがある。子どもを信頼するならば、それをウソと言うのではなく、自分が子どもに通じるときは、子どもと先生は信用し合っている。そこが教育だ。先生と子どもは暗黙のうちに通じ合っている。互いに信頼し合える。そこに教育がある。

自分が実践してきたから、昔の話も色あせないでしょ？ 一人の子がもう一人の子のぶらんこを取った。

どうするかと思つて見ていると、子どもが「お前が悪い」と言つて、乗つてる人を降ろしている。

津守 今西先生が河邊先生を教育したのですね。

今西 あのととき、親がそんな保育をやめてくれ、遊んでばかりいてと言つたことがあります。河邊先生に言つたら、やめんでもいいとひとこと言われた。

長等幼稚園が四十七年前も今も、遊びの教育を同じように実践しているのを見て、私は心強く思つた。

その後、河邊先生は坂元彦太郎先生に誘われて東京の大学に移られた。私は時どき河邊先生と話す機会があった。二〇〇二年六月に亡くなる数年前、どちらから言ひ出すともなく、あるときは鎌倉で、あるときは東京で、私どもは昼食を共にして話し合つた。

今西先生のお宅は、長年楽しんでこられたコサージュの花でいっぱいだという。

(保育研究者)

幼稚園と音場の話

林 健造

「音場」なんて耳慣れない言葉ですね。これは私の造語です。これが「砂場」とか「お砂場」と言えば、「あ、砂で遊ぶ所ね」とすぐおわかりいただけるでしょう。こっちは砂ではなく「音で遊ぶ所があるといいなあ」という発想です。

本誌の読者の多くの方は、ご存じでしょうが、私どもが敬愛しております倉橋惣三先生が園長るとき、お茶の水の幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）が現在の地に移転前、御茶ノ水駅の近くにあったころの話です。職員室のすぐそばの地面がいつも湿っていて、子どもたちがよくそこへ行つては、いわゆる泥んこ遊びに熱中しているので、泥んこや砂遊びの場所として、お砂場をつくりました。

夏には日蔭もつくつてあげようと、藤棚をつくりました。当時、全国的な幼稚園の発表会などを毎年のようにやっていましたので、幼稚園にはお砂場をつくり藤棚をつくるものということが全国的に広がったのだと、昔、及川ふみ先生にお聞きしたことがあります。

私の「音場」発想のきっかけは、今から五十年ほど前になります。私はお茶の水女子大学附属小学校から、新設の十文字学園女子短期大学に転任になり、すぐ幼児教育の学科長を命ぜられました。坂元彦太郎先生が学長となり、同時に附属幼稚園長も兼ねられました。坂元先生は、お茶の水女子大学附属小学校の校長先生でしたし、倉橋先生の親友だったので、不思議なご縁ということになります。やがて坂元先生の

ご逝去、ついで私が十文字学園女子短期大学附属幼稚園長になり、幼児と毎日楽しく遊べることになりました。

子どもの実態に触れながら、生きる力のたくましさ
に舌をまき、遊びを通しての素晴らしい発想力に驚か
され、特に一人ひとりの個性的な活動は砂のおだんご
やトンネル作り、ダンゴムシ遊びなど、毎日飽きるこ
ともない姿に接し、子どもが大好きになりました。こ
れらは、先生のほうから、きょうは土のおだんご三つ
作りましょうという指導の下ではなく、まったく自発
的な活動に熱中しているのです。子どもたちは絵を描
くことも音楽も大好きなのですが、お帰りの時間の
前など、「皆でお歌をうたきましょう」と先生がピアノ
のふたを上にあげ、タンタンタンと鳴らし始めると
大きな声でうたいます。歌がすむと、「では皆さんさ
ようなら」と帰っていく。私はなぜ音楽の活動だけ
が、先生の誘導で始まるのかなと、時どき疑問に思う
ことがありました。

振り返って、私は自分の幼児のころを思い起して
みました。仙台生まれの私が四〜五歳のころです。私の
家の隣には、仙台名物の笹かまぼこ屋さんがあり、そ
の店先で、かまぼこを作る様子を見ることができまし
た。右手に持った長い串でまな板を「タンタンタッタ
ラター」という感じでたたきながらリズム音をつけ
て、二〜三回繰り返し、左手のかまぼこに串を刺しま
す。私はそれを見ているのが好きでした。同時に五歳
上の兄も、これがまた大好きで、小一時間も毎日のよ
うに見に行っていました。自宅の夕飯のときは、兄が
魚の皿などを、はしでタッタラターとたたき始めると
私も負けずにたたきから、母をとうとう怒らせてしま
うことがしばしばでした。

それから、友達二〜三人とジュースの空き缶を坂道
で転がすこともよくしました。カンカラカンカラと、
いい音がしました。こんな遊びなどもやりだしたらや
められぬ楽しい遊びでした。

身近な「音」の楽しみを遊びながら偶然発見し、夢

中になることがよくありました。

最近、幼児をカラオケに連れていく家庭もあるらしいですが、こんな時代に、園でやっている音楽は、先生がピアノをたたかなければ始まらないのが不思議でした。自主、つまり自発の音遊びがなぜないのでしょうか。

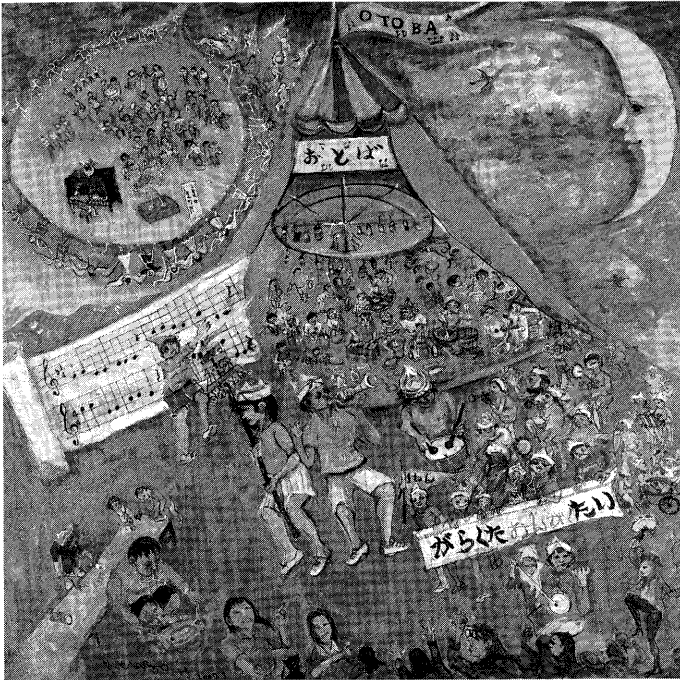
また、園庭の真ん中でマイク代わりに空き缶を持って、「二十一番、〇〇うたいまーす」なんていう楽しいことがあってもいいし、砂場があるんだから「音場」―音を出し合って皆で遊ぶ場所―があってもいいなあと、あるとき先生方に提案してみました。楽器を外に出すなんてと質問が出たりして、慌てて「いやあ、立派な楽器なんてとんでもない。空き缶とか段ボール箱とか、家で使わなくなった廃品で、いい音が出そうなものを持ち寄って遊ぶんです」などと話してみましたが長続きしません。

ほかの幼稚園で「音場」を始めたよという所を見学に行くと、青竹を輪切りにしたものや、小型のドラム

缶にペンキで楽しい模様を描いたものなどを使ったりして、子どもたちに大変人気がありました。演奏会みたいに先生も参加していて、時どきちよっと援助してやると、たちまちにぎやかなリズムにのって大喜びをしていました。

その後、テレビで妊婦がよい音楽を聞くことの影響が報じられたころ、私もこの「音場」を保育学会で発表しました。が、音楽家の先生の中には、「皿をたたく音は雑音で音楽ではありません」という論の方と、「いや大事な音楽の基礎です」という方と、討論になる騒ぎで、私のほうがびっくりしました。

今、画家として私が一番絵で訴えたいのは、「かのフリードリッヒ・フリーベルが一八四〇年に子どもの楽園としてつくられた幼稚園が危険にさらされ、幼児を守るサスマタなどの武具まで園で用意する時代に慨嘆。幼児にかつての楽園を返してあげたい」ということです。この思いを絵に描き、六本木の新国立美術館で開催された「水彩連盟展」に出品してみたのが、こ



音場・ガラクタ音楽隊



の写真の「音場・ガラクタ音楽隊」というテーマの百号の大作の絵でした。

「ガラクタ音楽隊」というのはもう五十年前も前、私が担任していた、お茶の水女子大学附属小学校の一年生の話です。

この子どもたちが附属幼稚園から入学した年の秋の運動会でのことです。終わりのほうで、六年生の鼓笛隊がきれいなマーチにのって校庭をひと回りするのですが、赤い帽子をかぶったり楽器を鳴らしての行進がとても格好よく見えたのでしょう。運動会が終わって二三日たったある日、よそのクラスの先生が、「林先生、きつと先生のクラスの子たちですよ、何だか変なことをして校庭を回ってますよ。早く出て見てください」と呼びに来ました。「えっ？」と私がびっくりして飛び出したら、あの音楽行進をまねて、十五分ほどでドンチャカドンチャカ、なべのふたや段ボールの菓子の空箱などをたたいたりしています。曲はいつの間にか拍子をとっています。いろいろな飾り

を自分たちで作ったり、見つけたりしたのでしょう。ほかの先生方もおもしろい一年生だなあと笑って見てくれましたから、ほっとしましたし、子どもってやるもんだな！と思ったものです。

その後、校長の坂元先生がNHKの取材の方にお知らせしたらしく、その翌日取材に來られて、「ガラクタ音楽隊だねえ」と名づけられた思い出を絵の下の方に加えて描いています。が、「音場」のかかわりの姿として紹介してみました。

私は、九十歳の今でも音楽が大好きです。「音場」構想も、この音楽が好きという気持ちからの発想の一つです。子どもの絵の教育については、自分の描きたいことを自分の方法で描ける教育をやつと獲得したのが、つい最近です。音楽のほうも、最近の世界的な遊びの大衆化は、ラップなどをも含め幅広い活動が見られますから、きつと子どもの「音場」も真剣に考えられる時代になったのではないのでしょうか。

(十文字女子短期大学名誉教授)

●● 観察者と保育者の対話 (10)

…… ●● 観察者から保育者へ

これは飛べられないね！

うふふ。そうね。飛べないのよね。

見たことあるかしらね。あひるさん。

じゃ、これは…。

あ、飛行機。飛べられる！

そうね、ブーンってお空を飛ぶわね。

かえるさん！ かえる、かえる。

跳べられる。

びよんって。

でも飛べられないよ。

うん。

お空を跳ばないけど、

草をびよんって跳ぶのよね。

もうすぐお帰り。学期末の一日。

エプロンシアターを演じる先生。

応答する子どもたち。

ありそつでなきそつな言いまわしに

照れつつ、可愛く思う気持ちを隠せず、

共に楽しむ母親たち。

言葉が交わされる。気持ち、交わされる。

この日訪れたチューリップ組は、もみじ幼稚園内に設けられた未就園児親子クラスである。あらかじめ登録した親子が決められた曜日に週一回のペースで通ってくる。現在、火・水・木・金に開設されている。

連日の雨は上がったものの、どんよりと曇ったその日、園舎屋上で予定されていた水遊びは、あえなくキャンセルとなる。部屋の隅の、ペットボトルのシャワーなど手作りの水遊びグッズだけが、出番が巡って

こなかったことに、多少しよげているふうであったが、中村先生はしかし、そんなことにはお構いなしに、同僚の渡部先生と茶話会の用意をし、マラカス作りの材料をそろえ、ピアノの上には紙芝居舞台とエプロンシアターを置き、部屋の上には紙芝居舞台とエプロンシアターを置き、部屋のしつらえに余念がなかった。在園児の弟妹が多いというこの日のクラスに、在園の子を送ったその足で、親子が次々やって来る。途中入園で、この日が二回目というAちゃん。中村先生はすーっとかがんでAちゃんの斜め横にひざをつき、「Aちゃんおはよ。よく来たね」と、軽く肩を抱きながら仰々しくない調子で言う。Aは、目を覆うようにしていた右腕を顔からゆつくりはずす。

それを見届けるか見届けないかのうちに中村先生の背後でほかの子が「ねえ、これ食べてるの?」と、水場近くに置いてある小さな飼育ケースを指さして言う。「うん、食べてるのよ。これ」と中村先生がケースを手にするや、別の場所で「きゃー、コーヒーカーツプ忘れちゃった」との母親の声。中村先生は片手に

ケース、片手は子どもと手をつなぎ、腰の辺りに二人、三人子どもをくつつけるようにしたまま移動して、「そしたらー」と、棚からプラスチックのカップを出し、「子ども用だけどこれでどう?」と、かの母親に渡し、何事もなかったかのように飼育ケースを床に置いて、子どもたち四人と中をのぞき込んでいる。一人の子どもが「ほんとだ、赤いうんちしてるねえ」と言うのに応じて、「そうでしょう? ほら。見て。やっぱりそうだったわね」。

ケースの中には、小さなカタツムリと、餌のニンジン。どうやら、チューリップ組でそれにあつわる本を読んでもらったり、話を聞いたりしたことが、二歳、三歳の子どもと先生とに、共通に一週間かそれ以上の時を空けてつながっているらしかった。

一畳のスペースに居場所を確保し観察をする私の所に、小さな弟たちが二人、どうも遊べそうだと、瞳を輝かせながらはってくる。ありがたいかな、彼らに相手をされながら、クラスの様子を見せていただく。

二、三か所で何やら楽しげにのどかに話をしていた母親たちの輪が、何とはなしに中村先生を中心に緩やかなまとまりをなし、何か共通のことを話題にしているふうであった。「あらそう。どうしましょうねえ」と、それまでの流れから異彩を放つわけでもなく、ちよつと困った口調で中村先生が言う。予定していた誕生会で、祝われる子どもが一人、欠席するとの情報を得たらしい。何と和やかに、困っていることよ、と私は半ばあきれつつ感心した。

そんな中、子どもの一人が黙々と取り組んでいたバズルを仕上げ、満足そうに「できた!」と言う。待っていましたとばかりに、「じゃ、(次は)マラカスだ!」と言ったのは、保育スタッフではなく一人の母親。「私もね、(マラカス作りを)そろそろやれたらいいなあ、なんて、ちよつと気にはしていたのよ」と声を立てて笑いながら中村先生が「言い訳」をし、マラカス作りの材料をそそくさとテーブルに運び始める。

続いて茶話会。かの小さな弟たちは、いすに腰を落

ち着けた母親の姿を確認すると、あるいははい、あるいはたどたどしく歩いて母の元へ。そして、多少の時間差はありながら、母はそれぞれに何でもないことのように上衣をめくり上げ、授乳を始める。赤ん坊に乳をやるという当たり前なはずの行為を、社会にやや開かれた場で見ることが久しく無かったので、それが当たり前そのまま展開されていることを感慨をもって見るともなしに味わい見る。

マラカス作り、誕生会、茶話会、外遊び代わりの別室での平均台やマットの遊び……。設定され、また実行されたことは実に多々ありながら、なぜ、かくも緩やかに穏やかに、事柄も人も際立たずに流れていくのか。保育者の何気ないたたずまいが、どうやらそれを可能にしていることに、私は心地よく驚き、共感を覚えながら、チューリップ組を後にした。



…… 保育者から観察者へ

この日は、一学期最後の保育日だった。屋上での水遊びは、ぜひやりたかったのだが、あいにくの曇天。数日続いた悪天候に水も冷たくなっていたので、楽しみにしていた水遊びは中止にした。それでも、夏休み前最後の回ということで、何かと盛りだくさんの予定が組まれていた。しかし、そんなことはおくびにも出さず、いつものペースで一日が始まった。

カタツムリは梅雨の初めごろから教室の片隅にいたのだが、ちょうど前回、カタツムリの飼育に関する幼児向けの本をみんなで見たばかりだった。ニンジンを食べると本当にニンジン色のうんちが出るんだと確認し合って、それから手のひらにのせたり、友達にそれを譲ったりし合う。ちよつとひんやりして、ぬるぬる…、にゆう〜と出てきた角にちよんと触ってみて、慌てて手を引つ込める。カタツムリも慌てて角を

引つ込める。小さな生き物との、どきどきわくわくの触れ合いが、子どもたちの心を育ててくれる。

それぞれが十分満足したところで、カタツムリを飼育箱に返し、せっけんで泡をぶくぶく立てて手を洗う。みんなで輪になって同じものを見つめる、みんなで肩を並べて同じことをする。知らぬ間に関係が深まる、仲間になる、友達になっていく。

その後ろで、お母さんたちは明るい声であいさつを交わしながら、身支度をほどこき、荷物をロッカーに入れ、きょうの茶話会（節目節目でお母さんにもお茶を出し、ゆつくりお話を聞く機会を設けている）のためのカップを並べたりしていた。

さて、そろそろきょうの製作、《マラカス》作りを始めようかと思つたとき、テーブルコーナーでパズルをやっていたお友達の声に誘われて、珍しくSが仲間に加わる。入級当初、なかなかみんなと一緒にできなかったり、座っていられなかつたりしたのだが（本当

はそんなことはまったく問題ではないが、お母さんはちょっと気にしてた)、自分からいすに座ってパズルをする姿にお母さんほうれしげにしていた。あゝ、マラカスを作る時間が…と思いつつ、でも、この場面を切り上げるに忍びなく、子どもたちのパズルが完成するたびに共に喜び拍手を送る。と、Sの「できた!」の声に、Sのお母さんが「じゃ、マラカスだ!」。あら、お母さんたら、ちゃんと予定表を見ていて、わが子がパズルをする姿に喜びつつも、マラカス作りの時間のことを気にしてくださったのね。かえって気を使わせてしまったわね、と思った。

このチューリップ組を担当するようになってから、今年で四年目になる。最初は、子どもたちと一緒に遊ぶのが楽しくて、子どもたちのほうばかり見ていた。しかし最近では、子どもの保育はもちろんだが、お母さんを応援する場でもあるのだなと、つくづく思っている。週に一度の出会いの場ではあるけれど、回を

重ねていくうちに、何気ないやりとりがごく自然に交わされて、子どもたちにも保育者にもそしてお母さんにも、共にいて心地よい空間をつくっていったら素敵だなと思う。

ある研究会で、同僚の岸澤先生は、「お母さんにとっては実家にいるような」と表現されたが、まさにそれが理想的な姿であろう。しばし家事からも解放され、ほっと一息つける、ちょっと困っていることを愚痴ってみる、うちの子だけでなく隣の子どものお友達も、みんなわが子のように褒めたりしかったり遊んだり…。そんな中で、それまで家庭で大切に守られ慈しまれてきた子どもたちは、お母さんのひざの上から一歩、二歩と離れていき、しだいに友達との世界をつくっていく。そんな場所に、チューリップ組がなっていけたらと思っている。

菊地知子（お茶の水女子大学）

中村恵子（東京都豊島区 もみじ幼稚園）

上海⇔東京

子育てメール便 (1)

橋本雅子
津守多実

まさことたまは、養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女兒。たまの子どもクナは五歳男児。親子で自然の中で遊ぶことが好きなのが共通点。

まさこの夫の申屠(スンドウ)は仕事や家族のことを考え、二人が知り合った大学時代から十数年におよぶ日本暮らしに区切りをつけ、出身地である中国・上海への帰国を決意。日本人コミュニティと離れた、地元に着した同居子育ての生活が始まった。

中国、日本の子育てにまつわるさまざまなことを、まさことたまのメール書簡で語る。

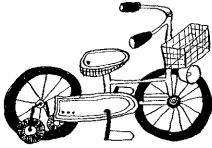
まさこ こんにちは。昨日、無事に到着しました。山口の両親の、子どもと孫への愛を一心に感じながらの旅立ち。上海では、申屠と孫への愛でいっぱいです。

私ももちろん、とても親身にももらっています。

今朝は早起した愛佳のペースに合わせて、敷地内の小公園で遊んだり、庭でテントウムシの幼虫にアブラムシのごはんをあげたり、本を書くと言って手紙のような文を書いていました。大切な人と別れては、ほかの好きな人に出会うということを経験している思いを表したかったのでしょうか。皆の名を言いながらた

くさんの字（らしきもの）を書き込んでいました。もう少し落ち着いたら、愛佳発の連絡をしてみましたと思います。

午後には、デパートまで足をのばして子ども自転車を購入しました。自分の足でなじみの空間を広げていくことが大きな自信になるように思い、早い時点で購入しようと申屠と話し合っていました。大好きなピンク色の、念願の自転車です。



私はこれから短時間、中国語の勉強です。まずはこちらの様子の報告まで。

たみ 早速のメールありがとうございます。突然のように感じられた渡中ですが、長い間考えていたとのこと。引越し前には慌ただしい中にも愛佳ちゃんとクナのお別れの期間をつくることができ、親子とも密度の濃いかかわりを感じることができました。

遠く離れてしまうのは寂しいですが、私たちも世界へ気持ちを広げたいです。クナによると中国は、大好きな鳥の図鑑で知った、ユーラシア大陸だから近いそう。国境のあることなどお構いなしに

すぐにも遊びに行きたい様子。

子どもの記憶は薄れるかもしれないが、二家族の親子一緒になって河原で駆け回った体験は、身体の中に残り、先へつながつていくことでしょう。上海、そして、帰省したときの山口、こちらの生活エリア東京と住居のある川崎での子育て状況などを知らせ合ってくださいませ。

あこがれの自転車を手に入れたとのこと。わが家の近くの河原で、広い空間が怖かった愛佳ちゃん、クナの自転車にまたがって、最後には自信に満ちた笑顔で走り回っていましたよね。新しい自転車が、未知の世界に入っていくと

きの支えとなりますますよくに
では！

(地域の)公園にて

たみ 敷地内の公園とは??

まさこ ええ、上海は集合住宅数
棟を高い柵や塀で囲った「小区」
と呼ぶ区画で住宅地が構成されて
います。団地のようなものから、
新しいものはニュータウンのよう
なものまで。小区内は管理会社や
住民が治安を守っています。小区
によってさまざまですが、共有空
間に遊具や健康器具、芝生やあず
まやなどがあり、住人の憩いの場
になっています。

今のところ、日中に小区内で子

どもと出会いません。夕方になる
と祖父母と二歳くらいまでの子ども
がベビーカーで集まります。ど
の公園の遊具も、階段の高さや滑
り台の長さなど、二歳児が一人で
遊んでも危険の少ないつくりで、
今の愛佳には物足りないようで
す。夕食後の散歩では、祖母と散
歩にきた七歳の子と遭遇し、私と
三人、小公園の芝生を走り回りま
した。

ただ、後から愛佳も、「明日は
同じくらいの子と遊びたい
ね」と言うほど、私たちの生活リ
ズムに交わる三歳〜六歳の幼児と
の接点はまたなく、謎です。未就

園児が小区にいないのかも。

幼稚園は延長保育が七時、九時
までとあり、保育園のような役割
を果たしているようです。寮のあ
る園もあり、幼児期から家族と離
れた生活を送っているわけで、申
屠も驚いていました。

地域で幼児が集まれる児童館や
子育て支援センター的なものは、
ないのかもしれませんが。夫婦で働
くことが当然の価値観なので、乳
児期は祖父母に頼んだり、富裕層
はお手伝いさんを雇ったりしてい
る様子です。

愛佳の友達と遊びたいという前
向きな気持ちを、私の気後れで足
を引っばらないようにしようと心

に決め、同時に、できるだけ母の気持ちがブレッシャーになってほしくないとも思っています。

地域の公園に行ったときのこと。自転車で十分の公園の一角には児童遊園があり、中央に複合遊具、その周囲に健康器具があります。幼児が遊ぶ合間に、同伴の大人が自転車こぎなどができるレイアウトで、近隣の祖父母と孫が来ていて活気があります。公園全体では、ダンスや民族楽器を練習するグループあり、拳法をする人あり、実ににぎやかです。

その公園で、上海ではあまり見かけなかった、結構やんちゃな三歳前の男の子と出会いました。公

園に入った途端、一緒に来た祖父の声かけで駆け寄り、愛佳の手を握ってきました。愛佳は驚いたものの、うれしい気持ちもあり、その子の友達が来るまで同じ遊具と一緒に過ごしました。

でもね、子どもたちが足こぎに並んで乗っている間、祖父が私の年齢や夫の勤務地などを尋ねながら、肩があたりくらい至近に寄ってきたのです。私は警戒し、愛佳を誘って遊園外で花を摘んでいたのですが、それでもやって来て、ダンスに誘います（多分社交ダンス。青空の下で高齢の方たちがしていました）。私は慌てて「ダンスは嫌い」と断りました！

帰宅後昼食時に、片言の中国語でその様子を夫の両親にも話しましたが、「一緒に踊ればよかったじゃない？」と陽気に父に伝えられました。微妙なニュアンスが伝えられなかったのか、文化の違いなのか？

正直言って、この一件がなければ、もう少し積極的に一緒にいられるようにしたただけどなあ。珍しいケースとはいえ、祖父母が育児していると、こんなこともあるのかしらね…。

自然、生きもののかかわり

まさこ 地域の公園の植栽は見事でしたが、上海市内で、原生林が

そのまま残っている場所の心あたりが申屠にはないようです。彼が子どものごろ好きだった街路樹は伐採され、木登りする子どもを見たのも今は昔、大きな樹木は整えられた花壇や芝生に囲まれ、子どもも足を踏み入れるすき間がありません。新たな緑化政策の上海です。

川に棲むゴイサギ、地域の公園に生息するトンボや貝、魚、雑草の一つひとつに、生活に近い自然のありさまを知りたい、遊びの中に登場させることで、上海の自然を生活の中に織り込んでいきたいと思っています。目を凝らして、きっかけを探しています。日本の自然環境の豊かさ、生態系の複雑

さはやはり素晴らしい財産かもしれないと、思います。

たみ 私の生活エリアである東京は、「触っちゃいけない」「危ない」と、不自由な自然ばかりですが、それでも身近な所に触れる自然が上海よりは多いのかしら。このところ、パパの家で毛虫が発生しています。昨年隣家から苦情があったので、早めに毛虫駆除をし、ジジは梅の実を早めに落とさなければならぬことを盛んに残念がりました。

中国からの大気汚染の影響で数日前に光化学スモッグ注意報が出たと新聞に大々的に載り、地球環境について考えさせられます。自然教育園で講義を受け、自然体系

が保たれることの難しさを実感するこのごろです。

まさこ 光化学スモッグの発生場所は上海もあてはまるようですが、注意報は聞かなかったような…。私の弟は、環境問題を研究している関係もあり、中国の大気汚染が年々ひどくなっていることを研究データからも知るだけに、私たちが中国に送り出すことに複雑な思いをもっています。

上海の五月は東京のように穏やかな気候。建設による粉塵のある地域も、ずいぶん減ったように思え、車からの排ガスも、数年前に比べて改善された印象を夫婦でもっています。もっと、目に見え

て身体的に不快になるかと思えば、そうでもありません。愛佳が敏感肌、アレルギー体質なため、反応が懸念の一つ。症状が出るなら、本当に早くに現れてほしいです。

そうそう、最近、愛佳は虫が気になってきました。ダンゴムシ、チョウ、モンシロチョウは日本にいたときと同じ虫。見慣れた、変わらない生き物、そして怖かったけれど、近づきたくもある世界。アリも触れなかったのに、ついにダンゴムシをつまめるように！

地域の公園からの帰り道、ダンゴムシを見つけて旧友に出会ったかのように話しかけました。ダン(と名づけました)をつまめ、喜

びのあまり家に連れて帰りたくなく、小さなボシエットに入れて慎重に運びました。自宅で小さな缶に、ごほんとして土と水と落ち葉を入れ、ダンを入れてふたをしました。さらには死んだカナブンを見つけ、死んでいたら動かないから「さわれる」と部屋へ連れて帰り、イエイエ(祖父)、ナイナイ(祖母)が嫌がるのも気にせず「ハナブ」と名づけるほどの盛り上がり。

人間の友達がいない分、虫や影や草花が、愛佳にはいっそう身近な存在になっています。自然教育園にまた行きたいともらしていました。

昨日は朝起き抜けにイエイエ

が、二軒先の隣人から、小型犬を借りてきてくれました！ 愛佳は驚きながらも、「友達なの」と抱いたり、小公園へつなを引いて一緒に走ったり。仲間がいると走り回るのがほんとに楽しそうだった様子です。その間、私はたっぷり眠りました。

何とこのご近所さんは、毎日三回十匹近い外猫にごほんをあけています。小公園の竹林の一角に犬小屋のような高床式の小屋を据えつけ、外猫たちのごほん置き場にしてるようです。人に慣れていない猫たちが、木に登る様子や、虫を捕まえる様子を眺めることができます。日中の小公園には猫の時間が流れています。

子どもと保育の情景 (13)

「表現」が生まれる「場」

戸田 雅美

一月の幼稚園、四歳児のクラスのことだった。

私は、保育室を出た所にある玄関ホールから聞こえてくる笑い声に誘われて行ってみると、だいちが、ティッシュペーパーの空き箱二つに両方の足をすっぽりと入れ、ゆっくりゆっくり動いている。時折立ち止まっては、真剣なこわばった表情で中空を見つめ、両方の腕を大きく広げ、高く上げてはまた下ろし、方向を変える。どうやら、だいちが怪獣になっ

ているらしい。笑い声はその動きから起こっていた。足に履いたティッシュペーパーの箱が、だいちの動

きをととても不自由なものにしているのだが、そのところがかえって、身体が大きい怪獣独特の重々しい動きに近い感覚を、だいちに感じさせているのかもれない。ティッシュペーパーの箱を、半ば引きずるように、ばたん、ばたんとは歩くたびに、だいちの顔の表情まで、怪獣らしくなっていくように見える。

しばらくは、だいちの怪獣の一人舞台だったが、正義の味方役のようへいが、登場して独特のポーズを決めると、いきなり怪獣役のだいちに飛びかかった。ところが、だいちが細身ではあるが背が高いの

で、クラスの中でも小柄なようへいは、押し戻されそうになる。すると、ようへいは、よりいっそうの力を込めて、一気にだいちにつかみかかる。ようへいにしてみたら、正義の味方が怪獣に負けるわけはいかない、という気持ちからかもしれない。あるいは、もともと、ようへいにとっては、本気で身体全体でぶつかり合うことのほうが、この遊びの楽しみどころであるように見える。

その迫力に押されて、だいちにはバランスを崩して、尻もちをついてしまう。ティッシュペーパーの箱が足にあつては、それも仕方ないことだろう。ようへいは、「やつつけたぞ！」と勝利のポーズを決める。ところが、だいちはずくに立ち上がると、再びゆっくりとひざをつき、苦しそうな表情で重々しく崩れて見せた。そうか……、だいちには、怪獣のやられ方こそが、この遊びの楽しみのポイントなのだ、私は気づく。

ようへいは、また、やつつけようとするようにやって来たが、だいちの倒れ方がおもしろかったらしく、その様子をじっと見ている。そして、だいちが、すっかり倒れてしまうと楽しそうに笑う。しばらくすると、だいちも、自分自身の怪獣のやられ方に満足したのか、ようへいの顔を見上げて笑う。

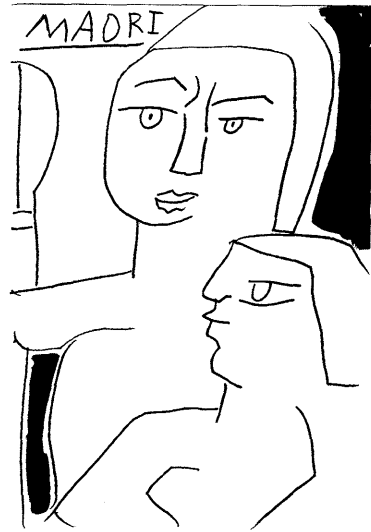
担任は、その様子を見ていたらしく、二人と同じように笑って、「だいち君の倒れ方、本物の怪獣みたいだったねえ！」と声をかける。だいちは、にこにこしながら、倒れたポーズのまま担任を見る。しばらくして、改めてだいちが立ち上がると、また、怪獣の動きが始まり、同じように繰り返され、笑い合う。

そのうちに、みなみが、正義の味方の仲間に加わった。先ほどまでと同じようにだいちの怪獣の動きから始まり、正義の味方がポーズを決めるところまでは、何事もなく進んだ。ところが、怪獣役のだ

いちとの戦いが始まると、今回はみなみが加わったため、これまで、だいちとようへいの間にあつた力のバランスが崩れ、だいちは、二人の力で押されて、一気に倒されてしまった。倒れ方にも余裕がなくなつて、尻もちをついて転び、泣きだしてしまつた。それほどひどく転んだようには見えなかつたので、だいち痛くて泣いたというよりも、自分が楽しみたいポイントが、相手にうまく伝わらないことでもどかしくて、泣いたようにも見えた。

担任は、だいちが痛そうにしているあたりを確かめていたが、けがはなさそうだと判断したらしいしい。「だいちちゃんの怪獣、戦い方も、やられ方も、怪獣らしくてすごかつたよね。ようへい君とみなみちゃんのこういうのもすごかつたね」とやられ方のクライマックスと正義の味方のポーズを、担任も大きな身振りでまねしてみる。

「それに足もすごいねえ、これだいちちゃんが、自分



で考えたんだ！ 本物の怪獣の足みたいに大きな足だね」と感心したように、ティッシュペーパーの箱が足にはまっている具合を興味深そうに調べる。担任が、だいちの怪獣に感心している様子を見ているうちに、だいちも少しずつ気を取り直してきたのか、表情が明るくなってくる。

すると、ようへいが、思い出したように保育室に戻つてマントを取ってくる。以前作つたものらしい赤いビニールにゴムひものついたものである。する

と、みなみが、「みなみもピンクのマント作りた
い！」と言う。

その後も、この遊びは続いた。相変わらず、つい
本気で取っ組み合ってしまうようへいとみなみ。そ
れに対し、何回も、痛い思いをしながらも、怪獣ら
しい新たな動きややられ方を工夫し続けるだいち。

一度は、みなみが激しく戦い過ぎて、せっかく作っ
た自慢のピンクのマントが破けてしまい、泣きだす
ハプニングもあった。けれども、時どき、担任が
やって来て、それぞれのそれらしい動きの工夫が引
き立つように、雰囲気を支えていた。このことも
あってか、この遊びは、結局、片づけまですっと続
くことになった。

保育後、担任は、「あの二人は、本当におもしろ
いです。つい本気になって戦いたくなくなってしまっ

ようへいと、本気で戦うのは嫌いで、たとえ最後は
やられてしまっても、かっこいい怪獣をやりたいだ
いち。あの二人は、遊びのバランスが崩れてトラブ
ルになることもしょっちゅう。でも、この遊びに
は、お互いがなくてはならない存在なんです。そ
んな遊びの場を支えたいなって思っているんですけ
ど……」と言う。

だいちがこだわっているのは、「表現」の世界と
言うこともできるだろう。ようへいとみなみも、だ
いちのこだわりを目の前にして、「表現」の世界の
おもしろさに気づいてきているように見える。しか
し、そのだいちの「表現」には、どこかで、ようへ
いたちの「本気」が刺激になっているのかもしれない。
こんなところに、子どもたちの「表現」が生ま
れる芽があり、その「場」（トポス）を支える保育
があるだろう。

（東京家政大学）

いずみナーサリーの 今までとこれから

中澤 智子

桜のつぼみがふくらみ始めた三月のある晴れた日、懐かしい人がナーサリーを訪ねてきました。大学に保育所ができて間もないころ、入園したMちゃんのお母さんでした。

「学位が取れました。もうしばらくは大学に来ることはないと思うので、一度ごあいさつにうかがいたくて。ここがあったから、また勉強しようという最初の一步が踏み出せました」とお話しくださいました。晴れやかな表情がとても印象的でした。

Mちゃんのお母さんは、別の大学を卒業し、出産後、

新聞で大学に保育所ができたことを知り、「これだ!」
とあって、いずみ保育所（平成十七年四月よりいずみ
ナーサリーに改称される前の名称）にいらしたそう
です。そして研究生として、研究の道を再開されました。

大学に保育施設ができたのは、今から五年前です。開
所したばかりのころは、ハード面もソフト面もゼロから
の出発でした。子どもたちのお昼寝の時間や、一日の終
わりに、保育の話し合いを重ねてきました。保育形態
（後述）も普通の保育所とは異なる中、いずみらしさつ

て何だろう？　いずみで大切にしたいことは？”という
ことを、一からつくっていく過程でした。

このような途上段階の中、Mちゃんのお母さんは新聞
でいずみに出会い、Mちゃんは保育所生活が始まり、お
母さんもまた新しい生活が始まったのです。ナーサ
リーもMちゃんもお母さんもみんな“一年生”だったわ
けです。Mちゃんは途中で居住区の認可保育園に入るこ
とができたので、実際のおつき合いは、一年少しでし
た。いずみナーサリーを卒所して二年が過ぎ、このよう
な機会に足を運んでくださったことをとてもうれしく思
うと同時に、大学の中にあるいずみナーサリーの存在意
義について、今一度見つめ直し、原点に立ち戻るべく身
の引き締まる思いがしました。

「大学に保育所設置を！」という要望は随分前からあっ
たそうです。

今の日本の保育事情では待機児童がとても多く、地域

によっては、フルタイムの常勤でも認可保育所に入れな
いところもあります。そのような中で、学生や助手、非
常勤講師などの身分では認可保育所に入所することはと
ても難しく、子どもの預け先を確保することは大変なこ
とです。子育てをしながら研究を続けたい、もう一度勉
強したいというお母さんの強い思いと、真摯な夢の実現
と後続の女性研究者の育成を支援しようという大学の先
生方の思いが重なり、検討に検討を重ねて、大学内保育
施設が誕生しました。多くの方の思い、願いと熱意・尽
力の下にできた保育施設であること、そしてその方々の
思いも背負っているということを中心に片隅に置いておき
たいと思います。

このような経緯で誕生した保育施設なので、利用方法
も、一般の保育所とは異なります。母親の授業や研究・
働き方に合わせ、週一日〜週五日で選択できます（学外
者は週三日以上の月極コースのみ）。フレキシブルな保
育形態と言えれば聞こえはよいですが、これは裏を返せば、

毎日集う子どもが違う中で、保育が展開していきます。

たとえば、週三日利用の子どもも同士の場合、週に一回しかお互いに会えないこともありますし、毎日朝八時半から十七時半までの子どももいれば、遠方からの通園で、片道二時間弱かかるため十時三十分ごろから十五時まで週一〜二回通うのが精一杯という家庭もあります。週一回というのは、子どもにとって「安心できる場」となるまで時間がかかることもよくあります。

以前は、毎日登園する子どものメンバーが決まっていた、遅くとも十時ごろにはみんなそろっていけば……と思ったこともありました。しかし、母親自身のライフスタイルの中に、どのようなバランスで育児と研究・仕事を組み込んでいくかは、それぞれの事情によって異なります。

子どもが生まれると、それまでの生活は一変します。自己実現したい・よき母でありたいという両方の思いにかられ、「私はこういうスタンスでいく!」とすっぱり決めて一直線に進めていける方もありますが、大半の方

は、「これでよいのだろうか?」と悩んだり、立ち止まったりするのではないのでしょうか。

そんなとき、模索しながら、自分の歩く道を決めて進んでいくための最初の一步を踏み出すには、週一〜二回利用という小さなステップは必要なのかとこのごろ思えます。「最初から毎日預けるのはちよつと……一緒に過ごせるときは過ごしたい」「子どもの様子を見ながら少しずつ研究の比重を大きくしていきたい」など、それぞれの最初の時期に、アクセル全開ではなく、様子を見ながら母親と子どもとつとのよりよい在り方を、お母さん自身がその時の自分なりの答えとして見つけていけたらよいなと思っています。

選択肢はたくさんあります。何を第一とするのか、何を優先するのか、物理的な面、精神的な面の両方ありません。何が一番よいのか、正しいのか、そんな答えはありません。お母さん自身が決めたことの中で、最善のことができればよいのではないのでしょうか。

いずみナーサリーは、お母さんにとって、共に子どもの成長を喜んだり、悩んだり考えたりできる伴走者であり、「あのとき、思い切って預けてよかった」「ここなら安心して子どもを預けられる」と思ってもらえるような場所でありたいと願っています。

私も、へ安心して預けられるへ子どもが楽しく豊かに過ごせるへことだと思えます。時に、親にとつてのへよい保育へと子どもにとつてのへよい保育へは、違うことがあります、どちらか一方だけに傾いたものであつてはならないと私は考えます。

預けるお母さんの視点から、いずみナーサリーについて述べましたが、ここで過ごす子どもたちにとつて、いずみナーサリーはどうあるべきか、どのような保育を大切にしてきたかも少し書きたいと思えます。

先述のとおり、フレキシブルな保育形態をとっているため、朝登園する時間も遅えば、前回登園した日も違う、随時受け入れるため、入園時期もそれぞれです。こ

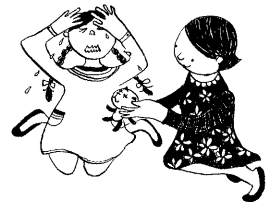
こで二つの事例を紹介します。

A君とB君は同じ三月生まれの二歳児です。利用日の関係で週に一回しか会えません。あまり接触がなく、お互いに意識をしていないように見えていたのですが、八月のある日、A君が大好きなお友達が皆お休みで、二歳児はA君とB君だけでした。二人は黙々とプールの中でそれぞれ別の遊びをしていましたが、保育士がA君の脇を持って大胆に「ユーラユーラ」と水の中で揺さぶると大喜び。B君も「僕も!」とばかりに手を広げ、順番に揺さぶり遊びをして、キヤーキヤー大騒ぎでした。その日の昼食前、手洗い室で二人ニコニコと顔を見合わせ、二人の距離がぐつと縮まった日でした。

楽しさは伝染します。それぞれの「楽しかった!」という気持ちで二人の気持ちをつないだように思えました。一緒に遊んでいるように見えなくても、お互いに意識しながら、気持ちの上では「一緒」ということがよくあります。粘土をしているときに、チラツと横を見て同

じようにしてみようとする子、その日は気にも留めていないそぶりで、次のときにやってみる子、とそれぞれの個性が出ておもしろいです。

週に三回来ているCちゃん（一



歳児）は、一時期、朝お母さんと離れ難く、お友達との間でもおもちゃの取り合いなどでぶつかることがよくありました。そんな日、一時預かりのDちゃんが泣いているのを見て、「ママ（がいなくて寂しいのかな）？」と心配し、おもちゃをどうぞと手渡しました。ママ恋しくて泣いている新しいお友達を思いやったのでしようか。月極利用の子ども同士では、けんかも取り合いもよくありますが、新入りや自分より明らかに小さい（皆、充分小さいですが）赤ちゃんには寛容な子どもたち。それは毎日会わなくても、「仲間」として意識し、お互いを認めているからではないでしょうか。

いずみナーサリーでは一時預かり保育も実施していま

す。一時預かりだからといって、必要な時間だけ「ただ預かる」のではなく、ナーサリーにいる時間が、その子どもにとって少しでも豊かなものであるように、月極利用の子どもと分けて保育するのではなく、お互いにとって新しい出会いとなるようにとの思いをもって、できる限り同じように過ごしています。その日その日が新しく、かけがえのない一日です。

朝、今日のメンバーを確認し、「二歳児は今日の出足が遅そうだね。〇歳児は九時半にそろそろ先にお散歩行きます。一歳のEちゃんは八時半から来ているから〇歳児さんと一緒にお外行く?」「きょうは感触遊びの好きな子が多いから指絵の具にしようか。FちゃんとGちゃんは直接指に付くのが苦手だから、筆とスタンプ、それから手を洗いながらまた遊べるように水の入ったバケツを用意しよう」など、それぞれのクラス担任が話し合い、子ども一人ひとりに合った参加の仕方ができるようにしています。そして子どもたちのお昼寝時、ミ-

ティングで午前中の保育について語り合い、次に活かせるようにします。

誰もが遊びの主人公であり、いろいろな物語が生まれます。環境もひっくり返るめて子ども一人では生まれることのない、子ども同士の影響力というか、響き合い・育ち合いがそこにはあります。このように、いずみナーサリーでは“個”を大切にしながら、定員十八名という小規模な集団であるよさを活かす保育を、日々考えながら実践しています。

そして、実践に欠かせないのは省察です。一日の終わりに、保育と離れた場所で、その日の保育を振り返ります。「本当はこういうことを伝えたかったんじゃないかな。あのとき、こうしていれば、Aちゃんはこうしたらどう？」

子どもの心の中は、あくまで大人から見たとらえ方です。本当のところは当の本人しかわかりません。でも、

少しでも子どもの心に近づきたいと思います。

「ヒューマンケアの仕事をする人は一生学び続けなければならぬ。学ぶ力がなくなつたとき、その場を去らなければならぬ」と、ある研修で聞きました。どんな仕事でも学び続けることは必要です。でも、保育士という仕事はこれが正解というものは一つとしてありません。答えは一つではなく、関係の中にあるものだと、このごろ思います。

親―子、保育士―子、親―保育士、子―子、親―親、保育士―保育士など、二者関係だったり、三者関係だったり、いろいろな関係がナーサリーの中では存在します。どれが一番大事というものはありません。それぞれが自分の人生の主人公です。一人ひとりが大切にされる関係性の中で、子どもも輝き、大人も輝く場を目指し、一日いちにちを大切に、一歩ずつ積み重ねていきたいと思っています。

(いずみナーサリー)

編集後記

あけましておめでとうございます。本誌はこれで創刊から108年目に入ります。昨年から少し冒険をして、よりおもしろく読みやすい内容と構成を目指してまいりましたが、いかがでしたでしょうか。今年の表紙絵には、新進アーティストの佐藤奈々先生に生き生きと砂場で遊ぶ子どもを描いていただきました。昨年大好評だった表紙の作者、林健造先生は今号で「音場」について綴ってくださっています。

ただいま、本誌のバックナンバーの内容を、『お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション』として、インターネットで閲覧できるように準備を進めております。読者のみなさまには、これからもよりご活用いただけることを願っております。ご期待ください。(H)

幼児の教育 第107巻 第1号

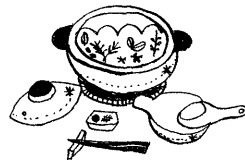
平成20年1月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 河合聡子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円(本体524円)
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々
扉カット 佐藤奈々
扉題字 津守 真
カット 斎藤明子
編集委員 伊集院理子
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

- ・運動発達を阻害する運動指導 杉原 隆
- ・保育者になったころ(6) 堀合文字
- ・六人の地域の宝が集う場所 金澤妙子



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。
はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館
「幼児の教育」編集部

Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimap@yahoocp.jp

キンダーブック創刊80周年記念出版

キンダーブックから生まれた待望作、ついに登場！

第1弾

村上康成 / 作 『キンダーブック3』より おにいちゃんっ ♪

「子どもと自然」をテーマに描いた、『キンダーブック3』表紙と詩、全60点を集めた詩画集。記念出版に際して詩を全点改編。「自然派」絵本作家・村上康成の魅力が詰まったファン待望の1冊。

※【キンダーブック3】(2002年4月号～2007年3月号初出)の表紙と表紙のことば集。

27×22cm
100頁
定価2,625円
(税込)

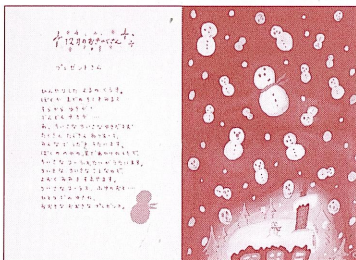


101-80

第2弾

荒井良二 / 作 『キンダーブック2』より Letters from Fairytale

— ぼくのおとぎ話からの手紙 —



101-70

※【キンダーブック2】付録マザーズブック「あ・そ・ぼ」(2005年4月号～2007年3月号初出)の表紙とことば集。

リンドグリーン賞受賞作家が贈る心温まるイラストエッセイ集。「癒しと想像の世界」が広がる内容は日頃の雑多な時間を忘れさせてくれます。先生をはじめ、お母さんも「ほっ」とするひとときを…。

19×13cm
54頁
定価1,365円
(税込)

続いて登場！

『キンダーブック1』より

第3弾

谷川俊太郎・覚和歌子 / 文 さとうあきら / 写真 ねえ

愛らしくてユニークな動物写真に当代きっての詩人たちが珠玉のことばを綴ります。子どもから大人まで楽しめるビジュアルブック。

23×20cm
64頁

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

フレーベル館の環境教育シリーズ第1弾!

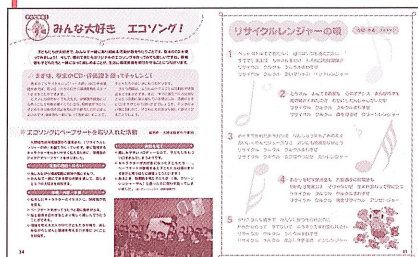
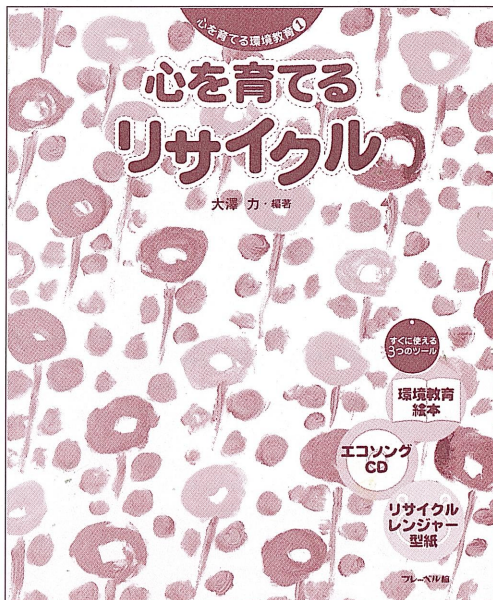
心を育てる環境教育①

心を育てるリサイクル

大澤 力／編著

地球が悲鳴をあげています! 環境問題が深刻化する現在、私たちにできることは何でしょうか?

本書では、子どもと一緒に楽しみながら実践できるエコ活動を提案。環境への思いが子どもの心を豊かに育みます。



エコ活動の事例



▲ 環境教育絵本



▲ エコソングCD

102-11

26×21cm / 64頁
定価2,415円(税込)

●すぐに使える3つのツール付き!

1. 読み聞かせにぴったりな環境教育絵本
2. 一緒にうたえるエコソングCD
3. ペーパーサート型紙

● 主な内容 ●

持続可能な社会のために／心を育てるリサイクル／始めてみよう! あなたの園のリサイクル園から家庭・地域へ広がるリサイクル／もっと知りたい! 環境教育

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。